


 ざいそう

## 韓国雑感 「近くて近い国へ」

前田 純一郎



昨年の秋からソウルの高麗大学で教鞭を執っている。ソウルの中心部、東大門の北東約3kmの城北区安岩（アナム）洞に広大なキャンパスを持つ大学であり、延世大学と並んで、韓国の私立大学の双壁と言われている。1905年、私立普成専門学校として、「教育による救国」を掲げて設立された。数年前に盛大に開校100年を祝ったばかりである。20学部、15大学院を持ち、学生数約36,000人をかかえる総合大学である。安岩キャンパスの荘重な正門を入ると広々とした庭園が広がり、その奥に洋風の大学本部の建物がある。道路を隔てて理工学部キャンパスや医学部付属病院などが並ぶ。現在の韓国大統領、李明博氏は卒業生の1人であり、在校生の中には、フィギアスケートのキム・ヨナさんがいる。李明博大統領は、ご存知のように、韓国の現代建設の社長、会長として辣腕を揮い、その後ソウル市長を経て、2008年に第17代大統領に就任した。ソウル市長時代には、その強力な指導力でソウルの中心部にある清溪高架道路を撤去し、生態系にも配慮した清溪川（チョンゲチョン）を復活させ、一躍時の人となった。

韓国の建設投資は、若干鈍化はしているが、プラス成長を続けており、今後も2010～2015年がおおよそ年2%増、2015～2020年で約1%強の増と予想されている。2015年の建設投資額は、約135兆ウォン（約10兆円）、2020年には約140兆ウォンに達する見通しである。GDPに占める建設投資の割合は、2015年でおおよそ13%となる。また、政府の建設関連の研究開発投資も、21世紀に入って急速な伸びをみせており、2008年には約4億ドルの規模に達した。

高麗大学を中心として韓国版の「ビル自動施工プロジェクト」が進行中である。政府の強力な研究開発助成を受けて精力的に取り組まれている。実用化されて実際の現場で適用されるにはさらなる積み重ねが必要と思われるが、担当者の熱意は高い。筆者も実証施工の責任者の若い技術者の説明を受けたが、彼は取り組みの現状と技術的課題を滔々と熱っぽく語ってくれた。十数年前の自分の姿を見るようで、懐かしさを覚えたものである。韓国の建築生産の特性をうまく踏まえて、日本とは一味違うユニークなシステム作りを目指している。

このプロジェクトの他にも、土木の総合的情報化施工や高層ビルの外壁メンテナンスなどのシステムが、国のバックアップの下に産官学が連携して取り組んでいる。

もうひとつの建設関連のトピックは、超々高層ビルの建設ラッシュである。漢江の南岸、蚕室（チャムシル）に建設中のロッテ・チャムシル・スーパータワーは、地上123階、地下6階、高さ555mの超々高層ビルで、2014年に竣工すると韓国で最も高いビルとなる。現在地下工事を終わり、地上階の施工に移っている。釜山にも500mを越えるプサン・ロッテ・タワーの建設計画があり、さらに数件の同様の計画も進んでいるとのことである。

2009年の名目GDP総額を比較すると、日本の約475兆円に対して、韓国は約1,065兆ウォン（約75兆円）と、現状ではおよそ6倍の開きがあるが、過去20年間の伸び率をみると、日本の20%増に対して、韓国は180%増と大幅な伸びになっていること、また総人口が、日本の約1億2000万人に対して、韓国は約4,800万人であることを考えると、そう遠くない将来に1人当たりのGDPでは、日本と肩を並べるレベルに達するのではないか。このように経済規模や技術の総合力では、日本にまだ一日の長があるのは事実であるが、韓国人の「目標を決めたらわき目も振らずにまい進する」国民性を考えると、早晩強力なライバルになることは十分に予想される。

日本としては、現状のレベルに安住することなく、さらに高度な技術を磨き、付加価値の高い市場分野を開拓するなどの一層の努力が求められよう。このような緊張関係の中で、お互いに競い合う「いい意味でのライバル」としての関係が期待できるのではなかろうか。韓国は、確かに建設の世界でもライバル関係にある。しかし今後は「いい意味でのライバル」として切磋琢磨し、互いに技術力や競争力を高めあうことで、東アジアの隣接する友邦として共に国際的な地位を高めていくことが重要と思われる。しばしば、韓国は「近くて遠い国」と言われている。しかし、このような緊張感のある関係を保ちつつ競い合うことが、真の意味で「近くて近い国」になる道となるのではないだろうか。